壊れた世界で鳩は鳴く

ウォーバード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
壊れた世界で鳩は鳴く

【Ｎコード】
Ｎ０４６０Ｖ

【作者名】
ウォーバード

【あらすじ】
此の世界では、三つの陣営が常に争い続けていた。此れは、三つの陣営の一つ、『王制同盟』に属する国、皇國のエースパイロットである冬飼　蒼璽と、一人の妹　杜若　穹の二人を巡る物語。注）中学時の駄文を編集して投稿しています。不定期更新です。

設定（前書き）

逐次追加予定です。

設定

☆登場人物

・冬飼（ふゆかい）　蒼璽（そうじ）

『王制同盟』一等空尉。皇國出身。二一歳。
第一〇八蒼翼鳳兵団所属のパイロットで、凄腕のコメットバード・ドライバー。
妹の穹を何より大切に思っている。熱血漢だが、普段は冷静な態度をとるようにしている。
穹より才能が無いことを嗤われ、罵倒されながら生きてきた。両親に厄介払いの意味合いも込めて空軍に放逐されたが、持ち前の忍耐強さと努力により、敵対勢力や中立勢力にまでその名を轟かせるエースとなった。
愛機の『金鵄』機載ブレインネームカナリアと共に様々な任務をこなす。社交的で明るいが、その実、差別されることを恐れ、それでも穹を護ろうとする自分自身に違和感と恐怖感を持っており、本当の自分を曝け出すということを滅多にしない。

・杜若（かきつばた）　穹（そら）（冬飼（ふゆかい）　穹（そら））

蒼璽の妹で、『王制同盟』一等空佐。皇國出身。一八歳。
『王制同盟』最年少の佐官で、第一〇八蒼翼鳳兵団副司令。
蒼璽よりも遥かに高い才能を持ち、文武両道の天才として生まれるが、自分より才能が無い兄が差別され、苛められるのを見て育った。
また、ありとあらゆる英才教育を受けたが、愛情というものを受けず、唯一優しくしてくれた兄にのみ心を開く。そのため、兄を差別する両親や周囲の人間、果は兄より才能を持って生まれた自分自身や、不平等な世界を造った神、そして世界そのものに、強い憎しみを持つようになる。

兄を護るため、空軍に入隊する。第一〇八蒼翼鳳兵団の実質的な指揮官。
普段は母方の名字を名乗っている。
持ち前の頭脳とカリスマ性・話術で他者を洗脳できる。

☆組織・国家

・王制同盟
皇國・帝国・王国・大公国を主力とする国家群。
加盟国全てが君主制国家である。
国土は狭いが、科学力と技術力に優れる国家群が多く、海洋国家も多い。そのため、世界の海の、実に三分の二以上を握っている。同時に空軍第一主義・制空権優先主義を掲げており、海軍戦力と空軍戦力では他組織を遥かに凌ぐ。
君主制、或いは限定的君主制による、民主主義と君主制のミックスによる国家・世界統治を絶対としており、自由連合とは対立・戦争状態にある。
一方、統一共和とも戦争状態にある。通称、同盟。

・統一共和

共和国と周辺小国家群からなる国家群。
元は帝国の支配下にあった地域の一つで革命が起き、独立（共和国建国）を宣言したことによって誕生した。しかし、その実態は世襲制大統領による独裁国家である。
国力に乏しいが、元帝国の装備をやりくりすることで、王制同盟の侵攻を防いでいる。また、同盟自身も、統一共和へ攻め入ることに本腰を入れてはいない。通称、統一。

・自由連合
連邦・枢軸民政を主力とする国家群。
連邦と枢軸民政以外は国力に乏しく、実態は二ヶ国だけの連合である。
自由と平等・民主主義を絶対と掲げる組織で、王制同盟と戦争状態にある。また、統一共和との仲は開戦こそしていないが、非常に険悪である。国力は強大だが、制海権・制空権をほぼ同盟に掌握され、軍は地下要塞や軌道上要塞を駆使して抵抗を続けている。
国民は自由と平等を第一に崇拝している、民主主義シンパが大半を占めており、それが同盟から非常に嫌われており、同時に恐れられている。
また、連合もまた、皇帝や国王・帝王・大公に忠誠を誓える同盟人のことを野蛮人と称し、恐れている。通称、連合。

・中立国家群
民国を中心とする、文字通り戦争には不介入の国家の総称。
あくまで総称であり、別に同盟関係にあるわけではない。
さらに、中には内戦状態にある国や、他勢力の代理戦争を呈している国・無関係の戦争をしている国も含まれているため、完全に平和というわけでもない。

・皇國

世界最強の空軍大国。皇帝を元首としている。皇帝は原則的に政治・軍事に参加はしないが、最終決定（裁可）は皇帝のみが行う、王制国家となっている。ちなみに、皇國人は藍髪藍眼が特徴。
コメットバードの開発技術は他の追随を許さず、世界中の制空権をほぼ独占している。
シンボルマークは『双翼の天日』。

・帝国
世界最大の技術大国。帝王を元首としている。帝王の権限が強く、国民を直接統治している。また、貴族制度も存在しているが、ほとんど形骸化している。
内陸国であり、陸軍大国でもある。
シンボルマークは『銀の鉤十字』。

・王国
世界有数の海軍・空軍大国。国王を元首としているが、国王をあくまで象徴とする、立憲君主制国家。そのため、元首の権限は限られている。
空軍力は皇國に劣るが、海軍力は凌いでいる。
シンボルマークは『三つ首龍の目』。

・大公国
世界最北の国で、最大の面積を持つ国。大公を元首としている。世界有数のの陸軍大国で、空軍も発達している。同盟では、人口が最も多いため、兵站を担当する。
シンボルマークは『黒い鷲』。

・共和国
帝国領の一部が独立し、建国された国。共和制と銘打っているが、実態は世襲制の大統領による独裁国家。伝統と格式のない独裁国家

として、同盟からは嫌われている。
シンボルマークは『十字架の盾』。

・連邦
世界で二番目の面積を持つ大国で、世界最大の量産能力・工業力を持つ。最高評議会による連邦制を採っている国で、自由と平等を絶対的正義と掲げている。
陸軍力では大公国をも凌ぐが、コメットバード技術は皇國より数段劣っている。
シンボルマークは『黄金の剣と星』。

・枢軸民政
小さな民主主義国家群を統合した連邦国家。連邦の手引きにより、王制が倒された国家が多勢を占めている。各国からの代表者で構成された元老院がトップである。
シンボルマークは『白い狼群』。

・民国
世界最古の永世中立国。
シンボルマークは『菩提樹の葉』。

☆用語

・コメットバード

本作世界における戦闘攻撃機の通称。戦闘機と攻撃機の境界線が酷くあいまいになり、形状やシステムも“飛行機”という概念から外れつつあるため、この名称が多用されている。

また、コメットバードの搭乗員をコメットバード・ドライバーと呼ぶ。

“コメットバード”という言葉は、皇國の世界初第一世代コメットバード『彗星（スイセイ）』から来ている。現在は戦争の要であり、コメットバードの性能が戦争を左右するとすら言われている。

『金鵄（キンシ）』４４Ｆ型

皇國空軍の主力コメットバード。最新の機載ブレインとジェミニ・システムを新規採用している、世界初の第七世代機。四基の小型電子炉を搭載し、事実上の航続距離は無限。エンジンを多方向に個別制御し、周囲に揚力フィールドを展開することで、自由自在な機動が可能となっている。上から見ると漢字の「山」のようなフォルムをしている。

『シャープスワロー』（Ｆ‐６７Ｎ）

連邦自由解放空軍の主力コメットバード。第六，二世代機で、『金鵄』と比べると少々性能が劣る。三基のエンジンを搭載している。大剣のようなフォルムが特徴で、先端の粒子ブレードで敵に突入することも可能。高速だが、安定性や旋回性能に難があり、ベテランでなければうまく扱えない。

『ウンディーネ』

帝国国防空軍の主力コメットバード。第七世代機で、前主力機にそのままジェミニ・システムを採用し、小改造を加えている。四基の

エンジンを円環に設置しており、前進翼がとても長い。独自兵器として高電磁パルスを装備している。

・ボンバーバード
本作世界における大型戦略爆撃機の通称。
『天照（アマテラス）』４７ＳＢ型
皇國空軍の主力ボンバーバード。翼竜のようなフォルムが特徴で、四基のエンジンを持つ。

・タンクバード
本作世界における対地制圧機の通称。コメットバードの中でも、対地攻撃に特化しているタイプの事を指す。中型爆撃機を含むこともある。

・バリアーバード
本作世界における防空掃討機の通称。大量の防空火器による防空シールドの形成や電波式シールドなどの形成を行う航空機。小型のものから空中艦クラスのものまである。

『ブルータートル？』（ＤＤＳ－０７Ｅ５）
連邦自由解放空軍のバリアーバード。機体のあらゆるところに機関砲を搭載し、強力な防空網を周囲に展開する。？は最新型。名前通り亀のような形状をしており、二基のエンジンを持つ。自身を守る装甲やシールドも強力なため、容易に撃墜できない。

・機脳（ブレイン）
本作におけるコンピューターのこと。発達し、人間の脳とさほど変わらないシステムとなったため、機械の脳で機脳、通称ブレインと呼称されるようになった。

固体だけでなく、液体状の機脳も存在する。
人間の脳と同じように考え、学習し、感情をもつものが大半である。

・憑依機脳（アイオーン・ブレイン）
皇國のブレインの一種。様々な兵器に搭載されている。機体に人間を憑依させる器の役割を果たすブレインで、人間の意識が入り込まない限りは稼動しない。また、あくまで“器”の役割に限定されているため、学習機能や感情は持たない。唯、使用する人間一人一人に合わせて調節されており、オーダーメイドである。

・第二機脳（ジェミニ・ブレイン）
皇國のブレインの一種。様々な兵器に搭載されている。使用する人間の思考をコピーし、それに学習機能を練り込んでいる。各ブレインは主にコピー先の人間から学ぶが、成長するとともに個性が芽生える。が、基本的な思考は変わらないため、使用する人間との連携はとても円滑である。

・空中航空母艦
皇國が開発している空中艦。通称空中空母。
現在は遊撃戦闘用の『飛鳥（アスカ）』、防衛要塞用の『白鳳（ハクホウ）』、そして戦略制圧用の『斑鳩（イカルガ）』の三種類に大別される。
『飛鳥』は一二隻、『白鳳』は九隻、『斑鳩』は六隻就役している。
なお、皇國は空中空母優先主義を掲げており、それが皇國海軍の水上空母（および護衛艦艇）保有数の削減に繋がった。

『飛鳥（アスカ）』
蟹と龍を合わせたような姿をしている遊撃戦闘用空中空母。中央部が円形になっており、X型の滑走路（および電磁カタパルト）などが設置されている。
さらに、右舷には主砲も装備されている。

・陸上戦艦

世界各国で運用される移動要塞で、陸上の主力兵器である。攻撃用や防空用などの種類がある。皇國の主力は『唐獅子（カラジシ）』、連邦の主力は『サイクロプス』。

・蒼翼鳳兵団

皇國空軍における戦闘攻撃航空団のこと。これが多数集まって戦術蒼翼軍（戦術空軍）を編制している。一個蒼翼鳳兵団につき、大体四〇機から五〇機が配属されている。

設定（後書き）

兵器の詳しいスペックとかは描写しません。

プロローグ（前書き）

こんにちは、本作ではウォーバードと名乗っている皐月二八です。

テスト前にモチベーションをあげるために投稿。

発掘作業をしていたら、昔のＰＣからみつけたので、少し編集して投稿することにしました。

不定期ですが、宜しくお願いします。

プロローグ

――――――――――――――――――――――――お前は邪魔だ。

そう呼ばれる事が多かった。

――――――――――――――――――――――――能なしめ。

――――――――――――――――――――――――“あの子”と比べて……。

そんなことを、よく言われた。

其れが嫌だった。
だから、努力した。

でも、それも、あいつの才能には遠く及ばなかった。
俺が一生懸命努力して手に入れるモノを、あいつはあっけなく手に入れた。

それでも、俺はあいつが好きだった。
護りたいと思った。
たった一人の、かけがえのない妹だから。

だから、俺は――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――空を駆ける。

こうすることが、俺の存在価値だ。

其れを証明するために。

そんな自分への恐怖を、まぎらわせるために。

夢を、見ていた。

私は、何時から私になったのだろう。

“神童”と持て囃された。

でも、誰も私の事を愛してくれなかった。

愛してくれたのは、唯、一人。

あの人だけだ。

窓の外から、あの人と有象無象の鉄屑が、蒼い空を駆けているのがわかる。

窓には、私自身も映っていた。

藍色の、肩まで届く程の長髪。

藍色の、キラキラ輝く瞳。
白い、本当にとても白い肌。
ピンクに染まった、艶やかな唇。

何度見ても、吐き気がする。

此の顔。
此の身体。

何度見ても、大嫌いだ。

英雄譚を見ていると、いつも思う。
たった一人の英雄がどれ程活躍したところで、世界は変わるのだろうか、と。

断言できる。

二人いれば、世界を変えるには十分すぎる。

プロローグ（後書き）

こんなプロローグですが、頑張っていきます。

攻勢作戦一八九八七六五号　その一（前書き）

その一とありますが、第二プロローグといった話。

作戦については次回くらいからです。

攻勢作戦一八九八七六五号　その一

機体停止用のレーザーチェーンが発射され、着艦用の鉤（フック）に引っかかった。
垂直着陸も可能だが、緊急時にしか行われない。
そのまま機体がロボット・アームによって、エレベーターまで引っ張られる。
愛機の『金鵄（キンシ）』４４Ｆ型より飛び降りた。

「お帰りなさい、一尉」

「おう」

整備士に挨拶され、俺は会釈した。

［冬飼（ふゆかい）　蒼璽（そうじ）一等空尉以下全コメットバード・ドライバー、帰投確認！］

飛行長に軽く説明した俺は、アナウンスを聞きながら、自室に戻ろうとして――

［冬飼　蒼璽一等空尉、至急、副司令室までお越しください。繰り返します――］

足をとめた。
そして、俺は苦笑しながら、副司令室へと足を向けた。

皇國空軍第八遊撃戦闘空中航空母艦『飛鳥（アスカ）？』は、蟹と龍を合わせた様な形をしている。そして、中央部分が円形になっていて、中にX型の滑走路が存在している。
さらに、右舷には空中重砲陣地を形成する空中重砲並の主砲も搭載されている。

搭載機数は四八機。ざっと、一個航空団並の戦力だ。

空中艦には、艦と言うからには艦長や副長、さらに展開している航空団の司令などが乗り込んでいる（但し航空団司令と空母艦長は兼任）。
杜若（かきつばた）　穹（そら）は、航空団――つまり第一〇八蒼翼鳳兵団の副司令を務めている。

俺は、一応第一〇八蒼翼鳳兵団の戦闘隊長となっている。が、指揮権はあくまで母艦である『飛鳥？』にあるので、実質的には唯の現場リーダーにすぎない。
そして、戦闘中にそんな悠長なことをしている暇はほとんどない。

皇國の空中空母には、主に三種類がある。

遊撃戦闘用の『飛鳥（アスカ）』、防衛要塞用の『白鳳（ハクホウ）』、そして戦略制圧用の『斑鳩（イカルガ）』だ。
『飛鳥』は一二隻、『白鳳』は九隻、『斑鳩』は六隻就役している。
遊撃戦闘用の『飛鳥』は、もっとも数が多く、つまり需要が大きい。
それだけ出番も多く、戦術蒼翼軍の蒼翼鳳兵団の中でも選りすぐりの部隊が選ばれる。
空母の乗務員や幹部も同様だ。

つまり、副司令である杜若一等空佐は……かなりのエリート。

何しろ、『王制同盟』最年少の佐官、それも佐官のトップである一佐だ。年齢は一八歳。
この時点で普通じゃあない。

が、もっと普通じゃあないのは――――――――その杜若一佐が、俺の実妹だということだ。

「冬飼　蒼璽一等空尉、入室します」

「どうぞ」

感情の無い、冷たい目と声が答えてくれた。

藍色の長髪と瞳、白磁も真っ青になる程白い肌。

背丈は一七〇程で、俺より頭一つ小さい程度。
細身だが、きっちり着こなす純白の詰襟軍服から分る程、スタイルが良い。

要は、美少女。いや、美女だ。
彼女からは、子供らしさが一切感じられない。
軍服姿が、まるで違和感が無い。

藍髪藍眼も、皇國人だったら普通の事だが、彼女に限っては“異様”に見える。アイドルなど目じゃあないくらい、その髪、瞳は綺麗だった。

「任務、御苦労さまでした、冬飼一尉」

「恐縮です」

「貴方は下がりなさい」

彼女はそう言って、横に立っていた秘書官を睨む。
秘書官は頷き、その部屋から離れた。

彼女はそれを確認すると、デスクと一体型のタッチパネル式ディスプレイに触れた。

すぐにカーテンが引かれ、ドアには電波式ロックがかかり、遮音から対盗聴用の警備システムが動き始めた。

その直後、彼女は表情を一変、いや、豹変させ、喜色満面で俺の胸に飛び込んできた。

「お兄様、ああ、お兄様！　穹は、穹はずっとお兄様を恋焦がれておりました」

そう言って、俺の胸に頬をあてる彼女――――――――――――――――穹。

「杜若一佐、ここは――」

「お兄様、今は、そのような他人行儀な言葉遣いはおやめください。誰も見ておりません。お兄様と穹の時間は、誰も踏み入ることは許されません」

そう言って、穹は頬ずりを続ける。

しかたない、か。

穹は、ずっと前からそうだ。

俺にしか心を開かず、俺にしか甘えない。

俺なんかよりもずっとずっと優秀で、才能もあって、努力も怠らない才色兼備な理想の女性なのに。

何時も、ずっと俺の後を追っていた。
俺を軽く追い越せるのに、ずっと俺を待って、そして俺の一歩後ろを歩いていた。

煩わしく思ったことは――――――ない。
一度たりともない。
それが、かえって怖いんだ。

お兄様に抱きついた後、私はお兄様と話（たわいもない雑談だ）をして、お兄様が出て行くのを見届けた。
そして、デスクを操作する。
空中に立体型のディスプレーが浮かび、赤いラインが表示される。

お兄様の乗機の飛行ルートだ。

見たところ、今日はかなりの乱戦になったと見える。
ルートを示すラインが、それこそぐちゃぐちゃになった毛玉のようになっている。まるで、サイクロンでも起ったような有様だった。

そして、別の機、つまりお兄様と同じ部隊の機のルートも表示させる。

さらに、お兄様が撃墜した機のデータも表示させる。
私が少し指を動かすと、部屋の機脳（ブレイン）がすぐに察知してくれた。
やっぱり、気が利く駒は良いわね。
表示されたのは……お兄様のルートをさえぎったり、お兄様のスコアを奪った機のリスト。

「これらはいらないわね」

私は再び指を動かし、書類の作成に入った。
色々理由をつけて、お兄様の邪魔をした連中を左遷させたりするためのものだ。
叶うのならば、私自らの手で破滅に追い込んでやりたいところだが、軍隊というのは自殺志願者の集まりだ。
私が殺してやる、と言えば、大抵の連中は泣いて喜ぶ。
まぁ、機体が撃墜されても、大体機体のブレインが自身を転送させると同時にドライバーを強制脱出させるが。
それでも、死亡率はゼロではない。
私が直接手を下せば、一〇〇パーセントの死亡率を保証できる。
冬飼家の資産は、実質的には私の支配下にある。
どんな地獄も牢獄も用意してやれる。
そうだ。

「あの秘書官……」

私は確かに、お兄様を呼ぶように命じた。
が、帰投直後のお疲れになったお兄様を連れてこいとは命じていない。

あの所為で、お兄様は疲れて辛い思いをしたかもしれない。

……いらないな。

まったく、だから秘書官などいらないと言ったのだ。
いったいどこの世界に、私より優秀で、お兄様より私に会う秘書官が……いや、人間がいるというのか。

これだから、軍隊は、組織は……。

いや、これもお兄様のため。

低能な有象無象にお兄様が傷つけられないようにするためだ。そのためにわざわざ、お兄様の所属する航空団の副司令にまでなったのだから。
司令は完全に、私の傀儡だから、この航空団も空中空母も全部、私の配下だ。

それだけではない。

愚かな連中は、皆私の配下になる。
富、容姿などのありとあらゆるものに釣られ、愚鈍な屑共はいくらでも寄ってくる。

鬱陶しいが、同時に好都合だ。
お兄様のためには。

私は立ち上がった。

そろそろ、阿呆な奴らが阿呆な作戦を考え出す頃だ。

攻勢作戦一八九八七六五号　その一（後書き）

こんな調子です。

次はいつになるか不明です。

攻勢作戦一八九八七六五号　その二

年に数回、このような大攻勢作戦は行われる。

ブリーフィングを終えた後は、コメットバード・ドライバー達が任務に向けて準備を行う。

といっても、飛行服を着て、機体に乗り込み、機脳（ブレイン）との接続状況をチェックし、ジェミニ・システムの調子を確認するだけだ。

『金鶏（キンシ）』には主に二種類のブレインが搭載されている。

まず、ドライバーの意識や思考を一時期保存（イメージとしては、機械に“憑依”する感じ）、機体の制御を総括する憑依機脳（アイオーン・ブレイン）。

そしてもう一つが、自身の脳を丸々コピーした機脳である第二機脳（ジェミニ・ブレイン）。

このうち、目玉なのがジェミニ・ブレインで、俺のブレインはカナリアと名付けている。初期設定では俺そのものだが、そのうち“個性”が芽生えてくる。ジェミニ・ブレインは機体そのものを総括し、まさに機体とドライバーが一緒の思考を持つことで、機体と人間の連携を密にする、というものだ。

近年、皇國空軍の御偉いさんが、より“個性”を育む教育に重点を置いているのもそのためだ。

つまり、パイロットが優しければ優しい性格のブレインが生まれるし、その反対のことも起こり得る。

此れを開発したのは――――そう、確か朝羽（あさば）とかいう皇國の研究者だ。

「兵器開発の進化が頂点を迎えた今、次に進化すべきは人間と兵器の“絆”――――連携である」

という持論を掲げる、皇國でも変人として有名だった人だったらしい。

その彼が掲げたシステムが、今では皇國どころか『王政同盟』にまで広がった――というわけだ。

『自由連合』でも、此れと似たようなシステムが開発されている――という話もあるが、俺は詳しく知らない。

軍人という人種は、大抵が死にたがりか、現実逃避したがる連中ばかりだが、ボンバーバード・ドライバーというのは少し違う。

『天照（アマテラス）』４７ＳＢ型とかに乗り込んでいる連中は、人を大勢殺しまくっているくせに、危険地帯に堂々と侵入しているくせに、生きて帰ってきたことを心の底から悔しがるか、不幸だと嘆く。

何トンもの爆弾を載せている大型戦略爆撃機（ボンバーバード）や、対地レーザー砲を腹に搭載している対地制圧機（タンクバード）は、敵からすれば確実に撃破しなくてはならない存在だ。

だから、ドライバー連中は、出撃日を命日と勝手に思っている。

死んで当然。それが彼らの考え方だ。

俺達のような戦闘攻撃機（コメットバード）に乗るドライバーは、いつかは死ねるとは考えているものの、１００パーセントこの出撃で死ぬとは考えていない。

死ぬ直前に、「あ、今か」と思うだけだ。

『天照』という翼竜のような姿をした四発の戦略爆撃機の大編隊の護衛は、つまりは爆撃機乗りの期待を裏切るということで、あまり気乗りする仕事ではない。

幸か不幸か、貴重な爆撃機を護衛抜きで出撃させるほど、此の戦域の同盟軍は逼迫していない。

『天照』だけではなく、王政同盟各国ののボンバーバードやタンクバードも一通り揃っている。

今回のプロジェクトに基づき、俺たちは必死に進撃しているというわけだ。

つまり、此れは攻勢作戦だ。

途中、何度も合流と再編を繰り返し、今ではこの方面の空軍戦力が集合しているのかと思うくらいの大部隊となっている。

皇國海軍の航空母艦から発進したのか、海軍機も混じっており、上を見上げると『斑鳩』が三隻ほどがゆっくりと移動していた。

敵の防空シールドを撃破しつつ、大編隊は徐々に目標へと向かっていく。

おっと、敵機の編隊が接近中。連邦の主力コメットバードの『シャープスワロー』だった。

まるで大剣かと思うような、先端で敵機を切り裂けそうな（実際に粒子ブレードが搭載されているんだが）フォルムの三発機だ。

「よし、行くか。死なないようにな」

――――――いや、俺は死なないよ、バックアップがあるからね。君が死んでも、自律機として生きてゆくからな……。

カナリアが突っ込むが、取り敢えず無視する。こいつはなぜか、俺と違ってやたらとお喋りだ。
が、言っていることは間違っていない。

そのためのシステムだ。自律機戦闘軍団の育成のためでもある、ジェミニ・システム。
まるで、死んでいった先輩方の亡霊のような軍団だ。

ふと下をみると、あっちはあっちで大規模な陸戦を繰り広げていた。地平線の彼方からは、煙のようにどんどん戦車やら自走砲やら戦闘機械やら陸上戦艦やらが近付いてくる。いや、こっちが近付いているのか。

爆撃隊や掃射隊がアクションを起こした。
どうやらこの戦線の向こう側の航空戦力は、全て連邦の自由解放空軍らしい。敵機はほぼ全てが『シャープスワロー』だった。

『黄金の剣と星』のエンブレムをつけた三発単座機の編隊は、『双翼の天日』や『銀の鉤十字』などのエンブレムをつけた航空機群に臆することなく突っ込んできた。エース部隊なのか、あるいは自殺志願者の集団なのか、いずれにせよ、助からないだろう。
『銀の鉤十字』が描かれた『ウンディーネ』の編隊が逆落としに突っ込んでいった。帝国国防空軍の連中だ。

「仕事熱心なことで」

思わずつぶやく。

――――お前が言うか。

カナリアが小声で言った。

五月蠅いなぁ、スコアとって何が悪い。

――――そんなことより、新たな敵機だ。……『シャープスワロー』に護衛された防空掃討機（バリアーバード）『ブルータートル？』。

ふむ、厄介な相手だ。

ミサイルを撃て、そう思った瞬間、カナリアが勝手に反応してくれた。“鐸兎(タクト)”という空対空誘導弾がきれいな白煙を残しながら飛んで行った。

『ブルータートル』シリーズは機体のあらゆるところに機関砲を搭載しているから、危なっかしくて近付けやしない。

さらに対空砲火が酷い。爆撃隊は、ちゃんと仕事をしているのだろうか。

とくに、あのセンスの悪い積木の塔のような陸上戦艦は、活火山かと思いたくなるような対空砲火を撃ちこんでくる。まさに怒涛の奮戦ぶりだ。奮戦、といっても向こう側にとって、という意味で、こちら側からしてみれば邪魔で仕方がない。

僚機から連絡が入る。思ったより陸上部隊の進撃速度が速いらしい。そろそろ、武装や燃料が心許なくなってきた連中は補給に戻るころだ。戻るといっても、今回戻るのは空中補給ステーションか、最寄りの航空基地だ。『飛鳥?』は、もっと離れたところで待機している。

浮遊要塞『斑鳩?』がようやく対地制圧を開始したのを尻目に、僚機とともに最寄りの基地であるペンギン基地へと向かった。

補給し終わったころに、まだ戦闘が続いているかは微妙だが、どの道一旦補給する必要がある。

ペンギン基地の滑走路は四本。長い滑走路が、まるで記号のような

形で並んでいる。真っ白な雪原のど真ん中にあるその基地は、大部分が地下にあるとはいえ目立つことこの上ない。
おまけに管制官からの指示が引切り無しに届いてくる。

別に混乱しているわけではない。
基地に着陸する、あるいは基地から離陸する航空機が多すぎるのだ。
おまけに帰還組の中には、被弾している機も少なくないはずだ。付け加えると、本来は他の基地に属している他国の航空機まで混じっているうえに、ボンバードなどの大型機も混じっている。

全く、よく衝突しないものだと感心してしまう。
人材と機材、その両方が優秀なのだろう。基地に居る方の人間は、ドライバーと違ってそれ程死にたがりではないのもあるだろうが。

敵が爆撃してしてこないのが唯一の救いというべきか、ペンギン基地は騒がしいことを除けば被害は皆無だった。

管制官の指示に従い、なんとか無事に着陸する。地面に激突して死ぬのは、ドライバーにとっては二番目に嫌な死に方だ。
ちなみに一番いやな死に方は、地上で死ぬことだ。これには病死とかも含まれる。
後は勝手に補給、そして簡易整備・点検が行われる。
俺は、整備員から飲み物を渡されると、それを一気に飲み干した。

一方、僚機のパイロットはシートに深くもたれて目をつむっている。
こいつ、寝てないか。

空中モニタに映し出された顔に向かって大声で怒鳴ると、見るからに機嫌が悪そうな視線を向けてきた。
本当に寝ていたらしい。

あいつのジェミニ・ブレインはマイペースな性格だから、きっと文句ひとつ言わずに勝手に自動操縦に切り替えたのだろう。
というか、普通は着陸時の衝撃で起きるだろうが。

この相棒は、時々任務中に爆睡するのが欠点だ。腕は確かだし、嫌いなタイプでもない。初任務時からの仲だった。

管制官から離陸許可が下りる。誘導員の指示に従い、機体を動かしていく。この機は垂直離着陸も可能なのだが、燃料の消費が激しいためにあまり多用されない。

轟音とともに、再び空へと帰ってゆく。

戻ると、かなりややこしいことになっていた。いや、空は完全にこちら側の支配下にあるのだが、陸がややこしい、という意味で、だ。

具体的には、膠着状態にある、といえる。

なんでも、向こう側が艦隊を投入してきたらしく、海軍機は大慌てで戻っていったらしい。
それから少し経った後、敵の新型タンクバードが攻めてきて、通り魔的な一方的攻撃を行い、こちらの陸上戦艦が停止してしまったのだ。
運悪く、一番先頭で。

つまり、動けない陸上戦艦が超巨大な障害物となって、あちらもこ

ちらも困ってしまっている状態らしい。

こちらの陸上戦艦は『唐獅子（カラジシ）』という、皇國陸軍のシロモノで、亀と獅子を合わせたような姿をしている。

問題なのは、これに連邦自由解放陸軍の陸上戦艦『サイクロプス』がちょうど寄りかかるように倒れてしまっていることだ。どちらも脚部をやられてしまい、動きようがない。

しかも、停止してしまった『唐獅子』や『サイクロプス』は一隻や二隻ではない。

陸上戦艦達は戦闘能力の方は健全らしく、シールドを展開しつつ、ミサイルやレーザー砲を乱射していて、完全に固定砲台と化している。

動ける『サイクロプス』が同盟軍を攻撃していたみたいだが、それらはとっくにボンバードの餌食となっていた。

そのため向こう側は一方的に攻撃を受けているのだが、残念なことにこちら側も巨大な障害物にせいで身動きとれない。

動けるのだが、動いた瞬間に敵から撃たれまくるのは明白だった。

そこで、いつの間にか自然停戦ともいうべき形になっていたらしい。

「どうなっている？」

「分からんが、陸サンが動くのをやめたぞ」

「何だ、何時(いつ)作戦終了の無線が入った」

「さぁ、こっちも聞いていないが」

あちらこちらで無線が飛び交う。

司令部も判断に困っているのか一向に連絡が無く、俺達は半分冗談、半分本気で混乱していた。

と、向こう側が急に後退し始めた。

ようやく、全軍に作戦終了を告げる無線が入った。

管制官の指示に従い、俺達も帰還した。

少なからずの脱落機が出たらしいが、それもいつものことだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0460v/

壊れた世界で鳩は鳴く

2011年9月13日20時21分発行